

す。それは宣教師の派遣やメキシコとの貿易を求める内容のものでした。さらに常長らはローマでも教皇パウルス5世に謁見して同様の書状を手渡しました。一行は当初、歓迎されたものの、ソテロに対する評判が悪化すると、政宗が地方領主に過ぎないものとして返書は得られません。彼らは失意の内にメキシコからフィリピンを経て1620(元和六)年に仙台へ戻ります。

■アマティの『伊達政宗遣欧使節記』

この使節の旅も天正遣欧使節と同様に幾つかの書物によってヨーロッパで紹介されます。本学図書館が所蔵する“Historia del regno di Voxv del Giappone, dell’antichita, nobilta, e valore del svo re Idate Masamvne...”(写真左)はローマ生まれの歴史学者シピオーネ・アマティ(Scipione Amati, 16th-17th cent.)が執筆して1615年にローマで刊行された初版本です。



彼は通訳兼交渉係としてマドリッドから一行に6ヶ月間付き添い、その記録をイタリア語で纏めました。この中には政宗の領国である仙台の情勢をはじめ、使節派遣に至る経緯や領内でのキリスト教布教の様子なども含まれています。日本では『伊達政宗遣欧使節記』とよばれています。

このアマティによる使節記はドイツ語版として1617年にインゴルシュタットでも刊行されており、本学図書館もこれを所蔵しています。書名は“Relation und gründtlicher Bericht von deß Königreichs Voxu im japonischen Keyserthumb Gottseliger Bekehrung...”(写真右)といい、常長の肖像と彼の洗礼名とが新たに挿入されました。当時は日本人の姿や装束はヨーロッパで殆ど知られていなかったため、こ

の肖像画は人々の強い関心を引いたものと考えられます。さらに、本書が南ドイツのインゴルシュタットから広がっていることは、使節の話がオーストリア、さらにはドイツ語圏を超えていたとも推測させられる資料です。

■学者による日本研究書の刊行

このように、我が国のキリスト教布教史に残る2つの使節派遣を振り返ると、イエズス会によって周到に計画された天正遣欧使節は見事な成功を収めています。一方、伊達家単独の計画と見なされた慶長遣欧使節は、布教に絡む政治情勢も影響して目的を達成することはできませんでした。

この2回にわたる使節派遣は、それ自身が日本人の地理的移動に伴う文化の発信活動でした。従って、これらを記した前述の書物は、同時期に刊行されていた滞日宣教師からの報告書や、それを基にした布教関係書にある対日観とは趣を異にするものです。特に、執筆はガエルティエリやアマティなどの学者によるもので、彼らは日本人の滞在を体系づけて記述しています。それらは、16世紀末期から17世紀初頭にかけての日本研究書と見ることができるものなのです。

ちなみに、天正遣欧使節の4人の少年は無事に帰国し、関白豊臣秀吉にも拝謁しました。しかし、後に棄教した1人を除く3人が殉教することになります。片や、慶長遣欧使節の支倉常長は無事に帰国を果たしましたが、それが仙台藩での禁教令発布と同じ頃であったため、約1年から2年後とされる逝去の時期まで軟禁生活が続きました。

このように、2つの遣欧使節に参加した当時の国際派の人物たちには、共通して厳しい人生の終着点が待ち受けていました。ところが、使節のヨーロッパでの様子を記した書物は、彼らの最期までを予測していなかったのです。

主な参考文献

- 『日本をヨーロッパに紹介した戦国期の宣教師たち(展示目録)』
京都外国語大学付属図書館 2006年。
- 『ザビエルとその周辺 渡来450周年記念展(展示目録)』
京都外国語大学付属図書館 1999年。

おく まさよし(司書・図書館事務長)